



記念講演

「ロータリーの道・未来への道」

ロータリー財団トラスティ
R1元理事 千 宗室



まず、私の永年の友人でもあり、R1の理事も一緒に務めさせていただいておりましたジョナサンB・マジグベ氏が、R1会長代理として凶らずもこの度おいでになりました。また奥様のアデ夫人、本当によろそご遠路京都までおいでいただいて感謝に絶えない次第でございます。既に、大日方ガバナーからもご紹介がございましたように、マジグベR1会長代理は、とても心の豊かな温かい人柄でございます。ロンドン大学を優秀な成績で卒業されまして、そして今、弁護士で大変な活躍をしておられる。私は、17人の理事の中で、このマジグベ会長代理が将来は必ずR1の会長になられる方じゃないかと、実は心密かに思っております。私の同期の理事の中から、既にもう4人も会長をやってらっしゃいますので、次はいよいよマジグベ会長代理が会長になられるのではないかと、どうぞひとつ皆様応援をしてあげていただきたい。(拍手)

そういう次第で、折角おいでになりながら、私ももっとご一緒にお相手したかったのではございますが、実は私自身、明日横浜で開催されます2590地区の地区大会にゲストスピーカーと呼ばれておられて、それを終えましてすぐに、明後日、朝にシカゴ、エバンストンへ参ります。ロータリー財団トラスティミーティングがあるわけでございます。先程、小谷さんが少しお話ししておられましたように、実は、1ヶ月ほど前に、今度は、コンピューターの講習をするから1日早く出てきてください、というような突然の指示がございまして、私、ジョナサンと一緒に理事のときに、一番最初に理事ノミニーで出ましたときに、R1のワンロータリーセンターのいろいろな設備をご説明いただきました係の人が、そのときジョナサンも覚えていら

っしゃると思うんですが、コンピュータールームがございまして、そのコンピュータールームがR1の非常に大きな組織にしてみれば、大変手狭い、小さな部屋なのにびっくりいたしました。こういうような機能的に大変悪い設備で仕事しているからいろんな仕事が溜まってしまって、そして各地のガバナーがヤキモキされるのではなからうか、というような質問をいたしましたら、これから徐々に良くなっていくと、将来はコンピューターで全て処理されるであろう、というようなことを申しておりました。それが今日では、立派な設備がございまして、コンピューターがおおいに作動しているわけでございますけれども、その割になかなか事務がはかどっていない、これはどういうところに原因があるかと申しますと、やはりロータリーの職員の問題であると私は思うのです。いわゆるロータリーの職員はいろんな機能を持つだけではなくて、ロータリーを知っている、ということなのです。そのロータリーを知るというパーセンテージが、どれだけ高いか低いかということによりまして、機能的に、ロータリーのこの大きな世界的な組織が、上手く動くか動かないかということになるわけなのです。ですから、理事の方々はもちろん、私たち財団のトラスティもそういう意味におきましては、事務的な、能率的なひとつの能力を身に付けておかなければいけないというようなことを我々もコンピューター、また、ITなど今日の時代に則するようなひとつの事務的能力を勉強しなければいけないということになったわけでありまして、私は、もともと手書きが専門でございますので、コンピューターというのはなかなか馴染めないでございます。私はいつもあちらこちらから多くのお手紙をいただきます。いただくのはありがたいのですが、お筆で書いたり、あるいは自分の手書きで書かれたお手紙をいただく

と、本当に心が温まるような気がいたします。活字だけが並んでおりますと、どうも、もうひとつ冷たいような感じがするわけでございます。上手、下手は別としてやはり字は自分で書かなければいけない、そういうように私自身いつも努めているわけでございます。明後日、エバンストンに行きますと、丸1日間コンピューターの講習をやるということなのですが、私全然知識がなかったので、孫が高校1年生になりまして、そのお祝にパソコンを親から買ってもらったんで、この間、孫に教えてと言いまして、孫がいろいろ説明をしてくれるのですが、説明を聞いている間に頭が痛くなりまして、ちょっとやらしてと言いましたらめっちゃくちゃになってしましまして、孫にそんなことをしてはだめだ、と怒られました。おじいちゃんの名前を出してみようか、ということになって、そんなこと出来るのかなと思っていまして、私の名前がスッと出てきまして、千 宗室 茶道家元で云々というのが出てくるのです。これには、びっくりいたしまして、もう悪い事はできないなと思ったような次第でございます。孫から教えられ、また孫から、これはダメだというような顔をされましたので私も、明後日エバンストンに行ってどうなるのかな、と今から非常にドキドキしているような次第でございます。

先程、マジグベ会長代理が素晴らしいお話しをしていただきました。最後に我々同期の理事として、その当時の会長でありますロイス・アビー氏、オーストラリアから出られました会長の言葉を言っておられましたけれども、私たち、理事になったときにロイス・アビー氏が言われたことは、「あなた方理事の方はもちろんのこと、全世界のロータリアンがいかにかロータリーというのを知っているかどうかということによって、このロータリーが良くなるか、悪くなるかということになる。あなた方は理事として、そういう意味においてはロータリーというものを本当に身に付けて、ロータリーというものの自体を行動に移してもらわなければいけない、行動に移すことによって、地域社会にロータリーというもの

が結び付ける事ができるのではないだろうか」ということを、ロイス・アビー氏が言われましたことを私は、鮮明に覚えているわけでございます。そして、その次の年度は、アメリカから出られました、ヒュー・アーチャーという会長でございました。皆様方も覚えていらっしゃると思いますが、非常に適切な、「エンジョイ・オブ・ロータリー」というテーマをつくられた方でございます。これが、世界津々浦々に出ましたときに、相当な波紋を起こしたわけで、これは、どういうことかと言いますと、「エンジョイ・オブ・ロータリー」、エンジョイという言葉ですね、ロータリーを楽しめばいいのだ、楽しむというためには、そんなに難しいことをロータリーは言っているのではない。いわゆる、気楽にやればいいのだという、実に楽観的な気持ちで「エンジョイ・オブ・ロータリー」というものを解釈された向きが多くて、私も2年理事のときに随分その「エンジョイ」という意味についての真意を教えて欲しい、ということで質問が参りました。そのときに私も、「エンジョイ」というものは、単にロータリーを楽しむ、遊び半分にやるというように理解されたら非常に困るわけでございます。長いロータリーの歴史の中で、ロータリーというものは、職業奉仕というものがあって、その職業奉仕というものを中心にして、善意「グッド・ウィル」ということ、それから寛容ということ、この善意と寛容という2つの両輪が、いわゆる職業奉仕というものによって大きく機能的に発展していくわけであり、そしてそれが、地域社会に大きな影響を与えていかなければならない。ですからこれが、1923年34という決議で出ました23の34、有名な職業奉仕問題でございます。[サービス・アバブ・セルフ]という言葉で、今日は、全ての「超我の奉仕」ということで、表されておりますけれども、かつてのロータリーというのは、職業奉仕というものが中心だ、職業奉仕が中心であるから自分の職業に利益があるようにしていくのは当然だ、というような、ロータリーに入れば顔も良くなる、そして自分の立場も良くなる、それから人から見ると、ロータリアンというステイタス、そういうステイタスに対する憧れと、それから羨望と尊敬の念で見られるというようなこと、いわばロータリーというのは、1つの自分

を保証する手形みたいなものだ、そういうような考え方が、全世界的に多かったわけでございます。そういう考え方で、ロータリーというものを利用されたのでは、ロータリーの崇高な哲学、いわゆる奉仕の理想というものが、行き渡らないということが非常に懸念されまして、いわゆる23の34、職業奉仕というものは、そういう単に利用するというようなことではなくて、自分が、職業というものを天から与えられた【ボケーショナル】いわゆる本当に天職である、という考えのもとに自分の仕事を通じて、そして対従業員、対顧客、そしてまた、地域社会に対して、どれだけのお返しをすることができるか、という、そのお返しをすることによって自分が職業奉仕のひとつの大きな正しい理念、哲学ということに決められたわけでありまして、そういう意味におきまして、私どものこのロータリーというのは、未来永劫であらなければならぬ、ところが、最近ロータリーというものが、曲がり角を通り越してしまっているような状態になっている、というようなことは、何か理念的なものがもうひとつ乱れてきているということが言えるわけでありまして、どうして、乱れているのかということ、を考えてみると、まず第1はメンバー自体が高齢になってきた。そして若い方が、ロータリーの中に入ってくれない、むしろロータリーというものを今まで外から眺めておられて、そして、ロータリーというものの良さというものはどこにあるのだろう、ということ、若い人達は、十分に外からですけども見た感じというものをそれぞれが持っているわけです。ですから、ロータリーに入って一体どうなるんだ、というのが若い人達のひとつの考え方でありまして、

私は、一昨日、日本、韓国、いわゆる日韓交流会議というのが、金大中大統領と小淵総理大臣との間に取り決めがございまして、日本側から11名の委員、韓国側から11名の委員これが政府から任命された両者の委員として、その会合が昨年9月に発足いたしまして、9月から会合を重ねたわけでありまして、第1回はソウルで行ったわけでありまして、第2回が一昨日ございました。6月にまたあるのでございますけれども、日韓交流会議で非常に大きな問題になっているのは、やはり青少年の問題なんです。いわゆる大人（年配者たち）は別とし

て、これから日韓、韓日の間をつないでいくという一番大切な役割を持っているのは、青少年である。単に2002年にワールドカップを韓国と日本でやるということで、多少今盛り上がっている感じはいたしますけれども、しかし、それはサッカーだけのことであります。サッカーを除いてしまったら、韓国の青年たち、日本の青年たちもほとんどが両国に対して無関心である。日本の青少年の人達もあまり韓国に対して、知ろうとすることもない。それからまた、韓国の青年たちも日本のことを知ろうとする気持ちがないのです。そこで、それをどういう具合にすれば一番日本と韓国の青年がスッと一緒になるかという話し合いが起きているわけでございますけれども、一昨日の話の中で私が申ししたことは、個々のロータリーでありますけれども、韓国のクラブと、シスタークラブということをやってらっしゃる所も多いのですけれども、台湾と比べますと、台湾の方が俄然多く、韓国の方が少ない状況です。それで、韓国の方のシスタークラブの方にいろんなことをしようと呼びかけても中々動いてもらえない。むしろ台湾の方は非常に積極的である。ですから、日本からも訪問する、向こうからも日本へ訪問してもらう、そして青少年交換もお互いにする機会が多いのですが、韓国となると中々それが実行に移せないという非常に難しい問題があるわけです。それは何が難しいか、単純に言いますと、いわゆる日本側もあまり熱意がない、それに対して、韓国側も熱意がない。だから、なしの隙のようなことになって、折角日本から申し入れても、返事が無いということが多いわけでございます。実は、私の京都クラブが本年の10月に75周年を迎えるわけでございます。75周年を迎えるに当たりまして、シスタークラブ、私の方は、韓国、特に京城（ソウル）クラブと同じように古い歴史を持っております、漢陽（ハンヤン）というクラブと、もう長い間交際しているわけですが、それも年に1回手紙のやり取りと両方の創立記念日のときに、両方のクラブが乾杯するくらいであって、なんらそれ以上の動きがないわけなのです。京都クラブにしてもそうなのです。それで、これではいけないということでこの75周年を記念して是非漢陽のメンバーを招待しようということで、招待状を出したのですけれども、それに



対してなしの隙なんです。いまだに、まだ返事が来ない。これはどういうことかと言いますと、全く関心がないということがあげられるわけです。どうして関心がないかと言いますと、交流がないわけなのです。このような、ロータリークラブにおいてもそういう交流がない、そしてしかも、交流がないと私たちが思っております、ある東北のクラブでございますけれども、その東北のクラブが韓国の青少年協会に呼びかけ、そして、韓国の青少年20名を招待したわけです。そうしたら、韓国の青少年協会の方から20名青少年を送ってきたわけなのです。そこで、その東北のロータリーアン、それからロータリーだけではなかなか大変なので、いわゆる国際的なボランティアの協会がございまして、そういう所が協力しまして、結局ホームステイを3日間してもらうことになりました。その結果、非常に韓国から来た青少年達は初めは堅くなっていたけれども、ホームステイをして、1日、2日、3日となりましたすっかり、心が緩んできて、そしてそのホームステイの家のお父さん、お母さん、そういう人たちと非常に楽しく接する、そしていろんな学校へ行って、青少年達とバスケットボールであるとか、バレーボールであるとか、そういうスポーツを通じて大変な交流、また、お茶や踊り、そういうものを通じていろんな交流をしたそうでございます。それが、僅かな人数でも、非常に地道ながら素晴らしい効果をあげたという報告を私が聞きましたので、それをちょっと一昨日紹介させていただきました。そして、非常に韓国側の方々も私の話と同調していただきまして、何も、100人、200人をするのではなくて、20人でもいい、25人でもいい、そういう少ないメンバーをロータリーとか、ライオンズとか、ソロプチミストとか、そういうようないろんな国際的な青少年をテイクケアしていただく団体で引き受けてもらって、青少年交換を実

践し、お互いにそういう人たちが、日本、韓国のことを理解してもらうということになれば、身近ないろんな問題が解決していくのではなからうか、というようなひとつの結論になったわけです。ここで私は何を言いたいのかと言いますと、日本の青少年たちは、今本当に自由奔放でございますよ。あまり自由奔放で、私は、もったいなすぎると思うのです。韓国に行きましても、日本の青少年と同じように茶髪でピアスをして、うすくまって道路でタバコをすっている様子は、日本と同じです。しかし、韓国の青年の方は、目の輝きに力があるのです。日本の青少年の方はどちらかというと輝きがない、力がない。これは、どうしてかと言いますと、韓国の方は、いつ何時北が攻めてくるかわからない、自分たちには徴兵というものがある、そして、兵隊に行かなければならない。いつ襲われても自分たちが即戦の状態、自分たちが銃を手に取らなければならない、という緊張感が韓国の青少年たちにはあるのです。ところが、日本の青少年には、そんな緊張感が全然ない、あまりこのようなことを言うと石原慎太郎さんみたいになるかもしれませんが、私はですね、やはり日本の青少年たちは素晴らしい青少年だと思います、しかし緊張感がない、緊張感というものがないということは、いわゆるトレーニングがないということです。そこで私は、ロータリーなんかでいつもやっておりますRYLAなどでは、本当に何と言うか、こんなことを言っただけでは悪いのですけれども、いつも昨年通り、とかいうように、筋書きができたものをガバナークラスが踏襲して青少年担当の方々、RYLAの担当の方々が苦勞してやられるのですけれども、私は昨年RYLAの講師に招かれて行きましたときに、あまりにも無差別で集めた、来ている人たちも喜んで来ていると言うわけではないのです。どうも借り出されて、集まっているという、烏合の衆の集まりみたいな、こういうのをいくらバスターガバナークラスや偉い先生の方々を呼んで来て、講演してもらっても、本当に目の輝きが出るどころか、皆眠たくなって居眠りするというような状態で、これはいかんということで、私が昨年喝を入れまして、こんなところで一生懸命話を聞いても何もならない、もっと外は

出てサバイバル、いわゆるアドベンチャー、というような気持ちで青少年を指導して行くようなRYLAでなくてはダメだ、ということで、今年からお願いして、RYLAのプログラムに、例えば日本を知ろうという意味において、茶道を経験する。あるいは、いろんな意味で、今まで自分が気が付かなかった日本のことを身に付けてもらうように、僅か1日、2日でありましても、そういうことを、ロータリーが率先して青少年を鍛えるという、RYLAは、そういう意味においては鍛えるということが抜けているのであります。ですから鍛えるということを入れたRYLAのプログラムを作っていかなければダメだ、というように思うのです。これには、反対もあるかもしれませんが、しかしながら、私は、そういう意味において青少年の人達にもっとロータリーをよく知ってもらう。知ってもらうばかりではなくて、ロータリーというものに対しての関心を持ってもらったならば、私はロータリーに入ろうとする気持ちもできくと思うのです。何か、ロータリーはおじさんばかりが集まって、いい格好をして、昼日中にご飯を食べて、歌を歌って、それでおしまいじゃないか、というような印象ばかりが地域社会の人たちが持つてるロータリーだと思うのです。たまにロータリーの人達がタスキをかけて駅なんかでゴミ拾いをしていますと、エリートの人たちがわざわざ見せるためにやってるのかな、というような批判までもらうような状態

ある。こういうことは、私たち自体がもっと反省しなければいけないと思うのです。ロータリー自体が、私は、反省するという時期にきていると思うのです。反省するということによりまして私は、ロータリーというものがもっと素晴らしいものになっていくのではなからうか、それが、私はロータリーが未来につながっていくディスコンティニューティーではなくて、継続（コンティニューティー）というひとつの大きな哲学というものを我々が見つけ出していかねばならないと思うのです。

私は、いろいろな詩も好きなのですが、とくに今日は、ひとつの詩を皆さん方に申し上げて終わりたいと思いますけれども、ローバート・ブラウニングが申しました、「春の朝」というのがございます。これは、有名な上田敏が訳しておりますけれども、「時は春、日は明日、明日は7時かた岡に露は満ちて、アカカゲロウが、名乗り出る。カタツムリが木の枝を這い、神が空にしろしめす全て世はことのなきこと。全て、世にことのなきこと。」私はこの最後の「全て、世にことのなきこと」、これが素晴らしい教えだ思うのです。私たちロータリアンは、善意と寛容を持って、全て世にことのなきようにひとつ世を導いていく、また我々は、その中の1人として、大きな希望を青少年に与えていく役目があるのではなからうか、それが私はロータリーの大きな仕事であると思います。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

千 宗室 ロータリー財団トラスティ 略歴

茶道裏千家家元。千利休居士より第15代。
同志社大学法学部卒業。ハワイ大学修学。哲学博士

1989年 文化功労者国家顕彰
1994年 勲二等旭日重光章受章
1997年 文化勲章受章

ロータリー歴

1954年 入会 京都南ロータリークラブチャーターメンバー
(1965年より京都ロータリークラブへ)
1972年～73年 京都ロータリークラブ会長
1975年～76年 国際ロータリー第2650地区ガバナー
地区諮問委員、地区委員長歴任
1976年以降 国際ロータリー会長代理(20数回)
国際ロータリー広報委員会委員、会長指名委員会委員

国際大会・地域大会執行委員
グループリーダー・カウンセラー 等歴任
規定審議会代議員、マルチプルポールハリスフェロー
ロータリー財団特別功労者、ベネファクター
米山功労者
1988年～90年 国際ロータリー理事
1991年～92年 国際ロータリー ピースカンファレンス委員
1992年～95年 国際ロータリー 会長インフォメーションカウンセラー
1994年～96年 国際ロータリー アジア地域大会執行委員、会長選挙管理委員
1996年～97年 ポールハリス没後50年記念事業委員
1998年～2002年 ロータリー財団トラスティ
1998年～99年 ロータリー財団アジア問題委員会委員
1999年～2000年 ロータリー財団プログラム委員